

秋田県衛生科学研究所報

第 9 輯

昭和39年度

REPORT
OF THE
AKITA INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH

(9)

No.9

1965

秋田県衛生科学研究所

秋田市古川堀反町20

20 FURUKAWAHORIBATA-MACHI,

AKITA-SHI, AKITA PREF., JAPAN

巻頭の言葉

所長 児玉栄一郎

昭和39年という年はまことに恵まれた年であった。その喜びの一つは土手長町の一隅に取り残されていた衛生研究所が古川堀反町の旧県立中央病院堀反病棟の跡に新築移転したことである。旧衛生研究所の建物は昔県警察部に衛生課のあった時代の建物で、狭い上に破損がひどく、衛生研究所の機能を発揮させるためには頗る不適当なものであった。細菌も化学も試験検査はおのおの唯の1室で行われた。細菌検査はこの室で赤痢、チフス、コレラ、ジフテリアばかりでなく、結核も食中毒も取扱い、更にトレポネーマも各種ウイルスなども全部此処で検査しなければならなかった。また化学検査室ではドラフトが毀れて修理の仕様がなく、風向によって毒ガスが室内に充満し、雨は洩り、床はくずれ、しかもこの室は庶務室への通路となっていたため、試験従事者は常に通行者に注意しなければならなかった。

また培地室などは便所への通路をも兼ねていたのである。従って、戦前のドイツの意気旺んな研究者らのことを考えない訳ではなかったが、来観者のある都度まことに肩身の狭まさを感ぜざるを得なかった。これは秋田県の文化にもつながるからである。

今度新築された研究所は面積も広く、コンクリート建築であるから立派である。所名も「秋田県衛生科学研究所」と改められ、内容も1課6科となった。従来の細菌検査(科)からは病理細菌科が生まれ、ウイルスと血清検査とが場を得て分離した。また化学検査(科)からは理化学試験が誕生し、同(科)で従来その一部を担当していたものからは食品栄養科と環境衛生科が新生した。また従来所長室で行っていた器機分析や放射能測定はそれぞれ場を得て落ちつくことができた。また従来病原ウイルスや細菌を取扱った技術者には入浴室も与えられ、細菌やウイルス、病毒で汚染されたまま家庭へ帰るといふこともなくなった。また重油による暖房があって、炭粉に心を奪われることなく仕事ができるようになったし、息をかじかむ手に吹きかけて試験管を振ることなどは遠い昔のように思われるようになった。

ただ本邦都道府県の衛生研究所と内容の異なるものに成人病科と母子衛生科とが新設されたことである。

成人病とは勿論病名ではなく、成人期以後に起り易い疾病の総称であって、その中には癌もあり、脳卒中や動脈硬化症も糖尿病も含まれるのであるが、これらを一挙に本研究所において解決しようとする大それた考えは毛頭もないのであるが、しかし秋田県としては最もいそがねばならないことは脳卒中や高血圧症の成因、また動脈硬化性心疾患の成立機序をつきとめるべく研究態勢を整えることである。脳出血、脳硬塞の機序は解明し得たとしてもその成因は全く不明であるからである。従って成人病のうちの脳卒中を例にとってみるならば、似て而して非なる疾病の診断鑑別からその成因、治療、リハビリテーションにいたる経過をも追うとなると、衛生研究所の成人病科では間に合わず、独立した機関を要するのではないかと思われるし、また母子衛生も同様である。

しかしこれにはある程度の基本的な調査が発展の上に必要なのであるから、現在の衛生科学研究所ではその端緒を開発する意味で大きな意義があると思われる。

なお此処に忘れてならないことは民衆に対する衛生教育である。このことについては衛生科学研究所が直接当らなければならぬ訳ではないと思われるが、しかし少くとも素材を提供することにやぶさかであってはならないと思う。

しかし兎も角旧衛研と比較にならぬ程の建物がたち、所員も心を新たに励んでいる今日成果が大いに期待し得ることと思う。此処に謹んで小畑知事を初め先進の諸賢並びに県民の皆様に対して深く感謝の意を表する次第である。